

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K20	氏名	秦 さやか
研究主題 —副主題—	国際理解教育の推進と授業づくり		
所属校	中野区立新井小学校	派遣先	早稲田大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>グローバル化社会を背景とする新学習指導要領においては、国際競争や国際協力が意識されている。また、持続可能な社会の実現のための教育（ESD）という視点も盛り込まれるようになった。こうした中、国際理解教育は現代社会の諸課題を扱い、自ら課題意識をもって意思決定や生き方を考える、総合的な学習の時間の活動として重要な教育である。</p> <p>しかし、現場においては国際理解教育の意義や内容が矮小化されている傾向にあり、本来の目的を達成するような在り方になっていないことに問題がある。</p> <p>また、外国語活動における国際理解教育も矮小化されている。英語を教えることが国際理解ではない。単なる文化理解やゲスト交流、英語の習得などをもって国際理解とする活動をこれ以上続けても、持続可能な社会は実現しない。英語だけを重視することは子供の心に英語至上主義を植え付けることになる可能性もある。これは多文化共生に逆行し、世界の言語文化の多様性を否定することにつながる。</p> <p>このため、本研究では、国際理解教育の本来の目的と意義を明確にし、広く深い教育活動の実践が普及することを目指して、多様な授業実践の方法を考えたい。そして、多くの教員に意義と方法を知らせていくことを目的とする。</p> <p>さらに、ことばを題材とした教材の開発により、英語教育化に対抗する外国語活動や言語意識を高める、新しい教育活動の在り方を模索する。</p>
II 研究の方法	<p>1 大学における学校臨床実習の場を活用し、学校の教育計画や担任の希望・願いに応じた多様な国際理解教育の実践を計画する。テーマや手法として開発教育を軸にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他の教員と一緒に実践を行う</li> <li>・私の実践を他の教員に参観してもらう</li> <li>・他の教員に授業づくりのポイントについて助言する</li> </ul> <p>以上の三つの方法を取り、多くの教員に本来の目的と具体的な実践方法や教材作成の方法について広める。</p> <p>2 大学の研究者と協同で「ことば」について学ぶ教材を開発し、所属校の5、6年生を対象に試行実践する。</p> <p>外国語活動が「英語教育」化していたり、外国語活動＝国際理解と誤解されている現状から、ことばを題材とした国際理解教育の実践の在り方を考えた。思考・判断・表現や言語活動の充実を図るために「ことば」そのものを対象とした教材を開発することで、各教科領域における「ことば」の教育を進め、児童の言語感覚を養う。</p> <p>→1と2を合わせて、合計5校、全70時間の授業実践を行った。</p> <p>3 各種研究会やセミナーで発表し普及を図る。 （慶應大学オープンリサーチフォーラム、武蔵野市国際交流協会教員ワークショップ、開発教育協会授業づくり講座、西東京市市民講座など）</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>○学校の教育計画や担任の希望・願いに応じた多様な国際理解教育の実践によって以下のようなテーマの教材開発ができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の言葉を幅広く扱う教材</li> <li>・シュミレーションゲームによって世界の格差構造を体験する教材</li> <li>・幸せの価値を考え、個人内の価値観の変容に気づく教材</li> <li>・いのちの教育のための教材</li> <li>・環境問題を扱い、世界と身近な生活を関連付けた教材</li> <li>・外国語活動や国語にも関連する、多言語活動・言語意識教育の教材</li> <li>・ことばを題材にして国際理解教育の教材づくりが可能だということ</li> </ul> <p>○この実践に関わった児童の反応は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで知らなかった世界を知ることができた。</li> <li>・世界における日本の暮らしの在り様が見えてきた。</li> <li>・途上国で活躍する人をモデルにして、人の役に立ちたいという思いをもつようになった。</li> <li>・多様な言葉に関心をもち、どんな言語や文化も尊重しようとする態度を身に付けた。</li> <li>・ことばをめぐる、歴史や人間関係などの背景にも意識を向けることができた。</li> <li>・世界の環境問題と身近な暮らしを関連付けることができた。</li> <li>・いのちへの感謝と、自分のいのちの役割を考えようとする態度を身に付けた。</li> </ul> <p>○この実践に関わった教員の意識を以下の点において変容させることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国際理解教育の意義について</li> <li>・方法や教材作成について</li> <li>・国際理解教育の授業実践への意欲喚起</li> <li>・外国語活動における国際理解のあり方や、多言語・複言語教育の意義について</li> </ul>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>国際理解教育の意義と内容を広くとらえると、今後はより一層重要な教育活動になると言ってもよい。そのためには、教員に本来の国際理解教育の意義や方法を周知し、教材や方法論にアクセスする環境を作る必要がある。その上では、以下の3点を課題としてあげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいや方法を知る機会がない</li> <li>・こうした活動で子供がどう変容するか認知されていない</li> <li>・教材へのアクセス方法がない</li> </ul> <p>教育委員会の研修などにおいてより有効な実践を普及していくことが望まれる。また、国際理解教育の教材集などを作ることも有効ではないかと考える。</p>